日本スポーツ社会学会会報

第13号

Sport Sociology

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
事務局：九州大学　1996.3.1

スポーツ文化の変容 多様化と画一化の文化秩序

杉本厚夫著　四六判／256頁／1950円

文化装置としてのスポーツがわれわれに語りかけるメッセージを読み解き、日常生活におけるスポーツのリアリティに迫る。

スポーツの社会学 重版出来

亀山佳明編　四六判／216頁／1680円

プロ野球、マラソン、ゴルフ、相撲、オリンピック等を通して、新しい視点からスポーツを分析し考察した意欲的な社会学論集。

高校野球の社会学 甲子園を読む

小椋　博・江刺正吾編　四六判／254頁／1950円

文化社会学的な視点から高校野球を縦横に読み解き、「閉された空間」から「開かれた空間」への可能性をさぐったユニークな論集。

比較文化論 異文化の理解

山口　修・齋藤和枝編　四六判／270頁／1950円

多様な視点から「異文化」への知的・学際的アプローチを試み、さらに具体的な文化比較を通して、異文化のとらえ方を考える。

現代メディアを学ぶ人のために

有山輝雄・津金沢聡広編　四六判／258頁／1950円

マクロとミクロを同時に兼ね備えた複眼的視点及び歴史的思考と空間的思考によって、現代メディアと現代社会の生活文化をとらえ直す。

現代文化を学ぶ人のために

井上　俊編　四六判／352頁／1950円

映像、文学、報道、宗教、テレコム、旅行、ファッション、スポーツ、医療、愛・性・結婚など、文化の諸相を通して現代社会を読み解く。

近刊

幸福の追求（仮題）〔原題 FLOW〕

M・チクセントミハイ著　今村浩明訳

サッカー狂の社会学 ブラジルの社会とスポーツ

ジャネット・レバー著　亀山佳明訳

世界思想社　京都市左京区岩倉南桑原町56　TEL075(721)6506〈税込定価〉

目次

《新事務局長挨拶》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

《諸報告》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

1．編集委員会からの報告

2．事務局報告

《キーノート・スピーカーのご紹介》・・・・・・・・・・・・・・5

《研究通信》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

社会システム論を読んできて

実践的「場」の身体資本と欲望の呪縛

《ネットワークしましょ》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

スポーツ社会学会をEメールでネットワーク化しましょう

「SoSNet」への参加の呼びかけ

《海外学会通信》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

《会員の動静》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

《編集後記》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

新事務局長挨拶

ご挨拶

三本松正敏（福岡教育大学）

年度末を迎え、会員の皆様におかれましては慌ただしい毎日をお過ごしのことと拝察いたしております。

前号でお知らせいたしましたように、事務局長の多々納秀雄先生が御永眠されました。多くの会員の方々より先生の早過ぎる他界を惜しむ声や追悼の意を寄せて頂きました。ここで改めて先生のことに触れるのは哀しみを呼び起こすことになりますが、先生のご逝去は、スポーツ社会学の研究においても、またスポーツ社会学会の事務局運営においても大きな痛手となっていることはご承知の通りです。特に、先生は、スポーツ社会学会の事務局長として、スポーツ社会学会の発展のために大きな抱負と数多くのアイデアをお持ちになっておられ、事務局長在任期間は、先生の研究もさることながら、学会運営に精一杯ご尽力される所存であるとお聞きしておりました。志半ばで逝かれた先生の後任を務めさせて頂くには、余りにも浅学非才で重責に過ぎることは、私自身が十二分に認識しておりますが、事務局の先生方に助けられながら、責務を果たしていくつもりでございます。

先生のご遺志を継いで、学術団体としての日本スポーツ社会学会の充実と発展に精一杯努力して参りたいと思っております。会員の皆様のご協力とご指導をお願いしてご挨拶にかえさせていただきます。

諸報告

1． 編集委員会からの報告

1．第４号に関する事項

1）『スポーツ社会学研究』の市販

『スポーツ社会学研究』の市販が第４巻から可能になりました。会報前号で報告した経過の通り、編集委員会は早期の市販実現を追求してきましたが、その結果近日発行の号からそれが実現したものです。

編集委員会としては、これによって機関誌の学術研究雑誌としての社会的評価がさらに一層向上することを願っています。今後論文等を投稿される会員の皆様が、編集委員会のこの願いを充分おくみ取り下さることを強く望みます。

2）大学・研究機関・公共図書館の導入促進にかんするお願い

市販の大きな目的として、各種図書館の『スポーツ社会学研究』導入を容易にすることがあったこと、すでにご報告したとおりです。

市販誌となりましたので、私人・公人を問わず通常の図書・雑誌と同様の扱いで購入していただけます。つきましては、会員各位の所属大学・学部・研究機関に付属する図書館や資料館への導入が進みますよう、呼びかけについてぜひご尽力ください。

さらに、関係されている公共図書館等にも、導入を推奨していただきたく存じます。なお第４号の価格は、まだ確定ではありませんが同種の学術誌をも参考にし、1,900円台を想定しています。

2．第４号の概要

第４号は、特別寄稿２編、論文６編、研究ノート１編、および故多々納秀雄教授追悼記事を中心に構成されます。編集委員会は刊行最終段階の作業を鋭意続行中です。刊行日は、例年通り３月中旬となる見込みです。

会員各位は、今年度の学会大会に出席されれば学会事務局と開催校宮城教育大学とのご尽力により大会当日お受け取りいただけます。都合により出席する事がかなわない会員分については、これも従来通り学会事務局に処理をお願いすることになると考えます。

3．次号への課題

1）投稿規定の運用について

機関誌創刊以来多大な尽力によって『スポーツ社会学研究』の基礎を据えられた前編集委員会から業務を引き継いだ今年度編集委員会は、前委員会の力に大いに助けられながら編集作業に従事しました。

その過程で、当編集委員会なりに今後の課題とすべき教訓を受け止めました。細かいことは省略しますが、もっとも大きなものは投稿規定の運用にかんすることです。来年度に向けて当委員会として早急に成案を得て年度当初に全会員にお知らせしますが、要は会員各位が投稿規定を尊重され遵守されることを重ねて要望するものとしたいと考えます。

なお、これにかんする意見がおありの会員はぜひそれをお聞かせ下さい。

2）フロッピー入稿について

上記は内容的なことですが、これは相対的にいえば形式にかんすることです。第４号に例を取れば、すべての投稿原稿が手書きではなく印字された原稿でした。さらに、最終的に掲載が可とされた段階でフロッピーによる入稿につき協力をお願いしたところ、これまたほとんどの作品についてフロッピーを送付していただくことが出来ました。

そこで、次年度に向けては最終段階でのフロッピー入稿を原則としていただく方向で、細目を早急に検討してみたいと考えます。成案がえられれば、これも年度当初にお知らせします。印刷所の対応範囲にあり、かつ多様な筆記手段を利用される会員各位がこれによって不利益をうけないようにするには、それなりに技術上の問題も詰める必要があります。編集委員会としても努力しますので、ご協力をお願いしたいと考えます。

もちろんこれにかんする意見も歓迎します。ぜひお聞かせ下さい。

（文責：平野秀秋）

2． 事務局報告

1．事務局の電話番号変更について

ダイヤルイン化に伴い、４月より事務局の電話番号が下記のように変更となります。

電話・ファックス：092-583-7855（山本）
電話・ファックス：092-583-7856（吉田）

2．『会員名簿』の作成について

会員名簿につきましては、1992年度に作成されて以来一度も更新がなされておらず、会員の皆様方には大変ご迷惑をおかけしております。また、E-mailをお使いの会員の皆様も徐々に増えており、新名簿の作成は急務の課題だと認識しております。このようなことから先の会報でも、住所等に変更のあった会員の方にはご報告を頂くようお知らせをしました。計画では本会報と同時に新名簿をお届けする予定でしたが、年度末に移動される方もおられることと思い、次号の会報発行時まで見送ることとなりました。名簿の発行が延びたことに伴うリスクを最小限に止めるため、本会報の末尾に、これまでにご報告のあった住所等の変更につきまして掲載しております。今しばらくは、こちらをご利用くださいますようお願い申しあげます。

3．国際シンポジウムのお知らせ

下記の要領で、「21世紀のアジアにおける生涯スポーツ振興に関するシンポジウム：市町村レベルにおける生涯スポーツの振興とアジアにおける連帯を目指して」が開催されます（次ページ参照）。詳細については、野川春夫（鹿屋体育大学）会員までお問い合わせください。

INVITATION

The National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, in cooperation with the Ministry of Education, Culture, Science and Sports, is pleased to announce an International Symposium on the Promotion of Sport for All Policies and Programs in Asia.

The aim of the symposium is to present and exchange information regarding the current local Sport for All policies and programs in Asian nations.

Invited speakers at this international symposium will be representatives, scholars, and government officials from various Asian countries such as China, Hong Kong, Indonesia, Korea, Malaysia, Singapore, Thailand, and Vietnam respectably. The keynote speakers will be Mr. Jurgen Palm of TAFISA, Mr. Yoshio Tsubouchi of ASFAA, and Mr. Russ Kisby of ParticipACTION in Canada.

Symposium dates

June 21 - 22, 1996

Symposium venue

The symposium will be held at the Mizuno Hall in the National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima.

Patrons

Ministry of Education, Culture, Science and Sports Mizuno Sport Foundation City of Kanoya

General Information

1 Shiromizu-cho, Kanoya City, Kagoshima, Japan 891-23
Tel: +81-(0)994- 46- 4963, 4960 or 4111
Fax: +81-(0)994- 46- 4963

Organizing committee

Haruo Nogawa (Chairman), **Yoshinobu Ohira** (vice chairman), **Toshiharu Yanagi, Masashi Kawanishi, Hiroko Maeda, Yumiko Hagi, Yoshio Sugiyama, Takuya Akamine, Jun Kamiwazumi, Takafumi, Shigeoka, Yoshiyuki Nakabayashi, Shin Kono, Sumio Hagiwara, Isamu Tanaka**

キーノート・スピーカーのご紹介

日本スポーツ社会学会第５回大会でのキーノート・スピーカー、マンドル夫妻のご紹介と、夫妻の研究業績のファックスサービスのご案内を松村会員より頂きました。ご活用ください。

1．ジェイ・R・マンドル＆ジョン・D・マンドルご夫妻について

お二人とも現在コルゲート大学に勤務しています。大学はニューヨーク州シラキュウース市の東南80kmにある小さな大学です。1812年設立の古い大学で、ハーバード等のIVYリーグに対してSmall Ivyとよばれ、全米ランキング17位だそうです。さて、ジェイは経済史（米国南部・カリブ海諸国の経済）を専門とし、ジョンは1970年代～80年代中期まで女性と社会運動をテーマにして、現在は同大学の女性学研究所の所長です。研究の特徴は『地域づくりとスポーツの社会学』（道和書院）の補論で簡単に紹介しておいたので関心のある方は見ていただければ幸いです。

日本では馴染みのない開発途上国のスポーツをとりあげている。文化伝播、ヘゲモニー論、南北問題など多彩なテーマに触れることができます。スポーツのグローバライゼーション（アメリカナイゼーション）へも独自の立場を展開しています。イギリスのカルチュラルスタディーズ、A・クラインなどの文化の植民地主義論へも第３の立場を表明する。学会でのテーマは、（仮題）「現代スポーツ理解へのオールタナティヴー英国文化研究を超えてー」としてみました。まだ、論文が到着しておりませんので詳しい内容は分かりませんが、A４で40枚を超える力作です。きっと、伊藤会員・上杉会員がコーディネートするシンポジウムの内容と交響して、面白い催しとなると思っています。

2．最近年のご夫妻共著の著書・論文

1) “Open Cultural Space: Grassroots Basketball in the English-speaking Caribbean,” in Michael Malec (ed.) Social Roles of Sport in Caribbean Societies, (New York: Gordon and Breach, 1995)
2) Caribbean Hoops: The Development of West Indian Basketball, New York: Gordon and Breach, 1994.
3) “ The Failure of Caribbean Integration : Lessons from Crass Roots Basketball, ” in Studies in Latin American Popular Culture, Vol. 13, 1994.
4) Class Roots Commitment: Basketball and Society in Trinidad and Tobago, Parkersburg IA: Caribbean Books, 1983.

3．論文のファックスサービスのご案内

彼らを招待するにあたって近藤会員（宮教大）を始めとして中島・市毛両会員、山下会員には、格別なお骨折りを載きました。有難うございました。この場を借りてお礼申し上げます。なお、彼らのペーパーをご入用の方は、ファックスでお申込み下さい。代金は彼らの招へい費用の１部として役立たせて載きます。送料は無料ですが、２本お申込みの場合は￥1,500、１本の場合は￥1,000とさせて載きます。

1) Jay R. Mandle & Joan D. Mandle, “Understanding Contemporary sport ” (40ページ)
2) Joan D. Mandle “Women's Studies, Sport and Social Change ” (19ページ)

ファクス送付先：0298-53-6378（松村）

（文責：松村和則）

研究通信

社会システム論を読んできて

野崎武司（香川大学）
nozaki@ed.kagawa-u.ac.jp

スポーツ社会学会の皆様、はじめまして。私はスポーツ経営学の領域で活動を続けております野崎と申します。経営学における組織変動、自己組織性の問題を端緒に研究を始め、ルーマンを読まねばならぬ、という痛烈な自覚と共に黙々とした研究生活が十年近くも経過してしまいました。今回、こちらで私なりの理解と私の抱える問題、特に研究方法の問題について述べさせて頂きます。これを機縁に新たなコミュニケーションが切り開かれることを期待しています。どうか直截なご批判等いただければ幸いです。

ルーマンの原点は、パーソンズであるより現象学であるといった方がよいと思います。もちろん法学者として出発していますけれども。まず私がルーマン理論に感銘した点は、その社会的世界の意味構成の考え方でした。そのごく一部を私なりに要約してみます[1]。超越論的主観（独我）の内部における意味構成（秩序づけ）とは、体験の固定された連なりに＜私＞を釘付けするようなものだ。ところが人間はいつも他でもあり得る可能性の世界に切り開かれているではないか。目前の体験が完全に他の可能性の世界を開示することがある。つまり可能性の構成の主観的準拠点などというものは放棄せねばならない。世界はいわば超越論的主観の視座から自由に構成しうる。可能性の世界は、何かしら主観から独立したような世界の秩序からもたらされ、主観はそれに応じて自らの体験の連なりを選択的に再構成し、環境世界を描き直していく。以上のような論理展開を進める中でルーマンは、（独我に先だって）「意味を構成する体験を発生的に規制し、従って既に構成された意味の指示地平だけでは示されない、社会的諸連関が存在する(p.53)[1]」という推論を打ち立てます。そのうえで「意味的ー対象的世界の間主観的構成のこの過程にとって、体験する諸主観の非同一性は根本の前提である(p.55)[1]」と主張します。ルーマンは現象学上の他我構成の問題には深入りしませんが、他我の存在を前提としない限り、社会的世界の意味構成の問題は解けないと言っているわけです。この問題をルーマンの難点まで指摘しながら、より精緻に議論しているのが西阪仰[2][3][4]でしょう。「意味のありかは、自我と他者とに跨るコミュニケーション過程そのものをおいてほかにない(pp.63-64)[4]」という西阪は、意思疎通過程そのものとしての社会的世界は、決して構成された社会的世界（意味世界）ではない(p.371)[2]と述べ、＜意思疎通過程としての社会＞は、世界内に＜ある＞何ものかを構成するもの以外ではありえず、決して構成された有意味な何ものかではない(p.373)[2]、としています。つまり、世界の意味も、個のアイデンティティも、コミュニケーション過程の産物であり、その今展開し続けているコミュニケーション過程自体は、決して＜何ものか＞として捕捉し尽くすことはできないと言ってるわけです。コミュニケーションとは不思議なもので、自己主張する明確な個の存立を前提としているように見えながら、その個の存立自体をも支えているのがコミュニケーションであるわけです。これは、ルーマンにおいて、自己言及的な再参入の循環として説明されていくことになります。

さて、80年代に入るとルーマンは、意味構成に関して次のような発言をするようになります。「意味は、まず身体における生の感覚に位置づけられており、ついで意識として現象するといった、ある種のシークエンスにしたがっていると言ってよい。さらに他方では、意味は、他者による

理解とかならずかかわり、それからコミュニケーションとして現象するシークエンスにしたがうということもできる(p.150)[5]」。ここには、向こう側から意識に立ち現れてくる＜生の感覚＞というものへの深い関心が伺えます。この問題に決定的な解答を与えたのが、大澤真幸でしょう。大澤の議論を先取りして要約すれば、意識の向こう側から現れてくる知覚や情動のような、意味の根拠とされるようなもの、生の手応えとして与えられてくるようなもの、それ自体が社会的コミュニケーションの産物であるということです。大澤の多彩な仕事のエッセンスの一つは、＜間身体的連鎖による超越性の経験的構成＞として要約できるでしょう。意味世界は、意識による間主観的構成という以前に、身体（知覚や情動の源）による間身体的連鎖として構成されているという考え方です。この考え方は、自己言及のパラドックスを脱パラドックス化する機制としても働きます。身体においては、＜求心化作用＞と＜遠心化作用＞という二つの志向作用（対象の意味を確定しようとする作用）が連動して共働する(p.84)[6]といいます。求心化作用とは、事象をこの身体の近傍の内に配列された相で把握しようとする志向作用であり、その無際限の自己中心的な働きをいいます。遠心化作用とは、他の遠心点を中心に事象を把握しようとする志向作用です。相互に反転しうる求心化ー遠心化の二重の作用は、任意の身体に他者への直面を余儀なくさせる（他我構成問題）といいます。大澤は、私というものがまずあって、その類推として他者が認識されるのではなく、対象を捉える私の心の働き（求心化作用）に、必然的に連動してしまうもう一つの裏返しの働き（遠心化作用）によって、私とは異なるもう一つの＜心の所有者＞の存在が告知されてくる(p.69)[8]のだと言います。「他者の存在は、『この私』の存在に、必然的に随伴する。それは、心が対象を捉えること（求心化作用）が、同時に遠心化作用と連動していることの帰結である(p.77)[8]」と述べています。この身体上の求心化ー遠心化作用は、すべてのコミュニケーションの原型である(p.330)[7]と大澤は言います。さて、ここで注目すべきことは、この身体上の求心化ー遠心化作用の連動が、志向作用の複製機構として作動しているということです。ある身体の特定対象への志向作用は、他の身体（他我）の志向作用を自らの内に否応なく顕現させ、その反鏡的作用の中で、特定対象の意味を錬成することになります。すなわち、志向内容（対象の意味）は、「求心化ー遠心化作用を通じて連結された一個の間身体的連鎖の上に共起する、一連の志向作用（他者達）に共帰属(p.84)[6]」してくるわけです。この事態が生まれるとき、以下の二つの推論が成り立つと大澤は言います(p.85)[6]。第一に、志向作用の対象は、どの個別の志向作用（身体）に対しても既在性を帯びて現前するであろうこと。つまり、対象がある個体の志向作用に対して現前しているとき、既に別の個体の志向作用に対して現前していたものとして受け取られてしまうだろうこと。第二に、志向作用の対象は、どの個体の志向作用（身体）からも独立して自存するかのごとく現前するはずであろうこと。つまり、志向作用が捉えた対象は、複数の志向作用の＜全体＞に帰属しているのであって、どの個別の志向作用の偶有的揺らぎからも独立した分節形式において分凝し、その分節形式を自らの正当な様式として身に帯びてしまうということ。以上の大澤の議論から次のことが理解できます。我々は、通常自分の外にある事物の世界（超越性）を疑い得ないものとして認識しているが、その構成は志向作用に基づく経験から構成されるものであるにも関わらず、その経験に先立つものとして投影されているのだと。閉鎖的な修行を共有した多くの信者が、教祖の言葉に躰の底から打ち震える体験をする、そんな事態も腑に落ちてきます。スポーツに熱狂する集団も同一の機制を孕んでいるように思います。

以上、社会システム論を読み進んできまして、かなり高いところに舞い上がった気はしますが、正直言ってどこに着地すべきか苦慮している状況です。このまま吹きとばされることのないよう努力したいと考えています。最近私が考えている研究方法上の問題は、「社会調査とは何か？」ということです。それは端的にコミュニケーションではないかと考えます。特に質問紙による大規模な

社会調査も、研究に箔をつけるお飾りではなく、客観的リアリティを抽出し真実を確定する神の道具でもなく、常に新たなリアリティを創生させようとするコミュニケーションなのではないかと考えるのです。但しそこには多少の歪みがあるように思います。被調査者に期待されていることは自らのあり様を十全に調査者に伝えることですが、その伝達の文法は被調査者には半透明です。また最終的な解釈は調査者だけに特権的に与えられています。通常調査者の側から被調査者には何も伝えないことが想定されていますが、必ず意図せぬ影響を与えているはずです。こうした中、研究者（知識人）の役割とは何でしょうか。最後にルーマンの名言を付しておきます。「理論を造りだすということは他のすべての行為と同様ー状況の中に生じ、また与えられたものを引き受け、しかも予期せぬことを経験しなければならない、そうした行為なのだ[9]」。

1）ハバーマス・ルーマン 佐藤他訳(1984)『批判理論と社会システム論』木鐸社 pp.50-64
2）西阪仰(1985)「意味・行為・行為の連鎖」『社会学評論』No.143 pp.369-383
3）西阪仰(1988)「行為出来事の相互行為的構成」『社会学評論』No.154 pp.102-118
4）西阪仰(1990)「コミュニケーションのパラドックス」土方編『ルーマン／来るべき知』勁草書房 pp.61-87
5）ルーマン 佐藤勉 監訳(1993)『社会システム論（上）』恒星社厚生閣
6）大澤真幸(1993)「自己準拠の条件」『現代思想』Vol.21-10 pp.73-90
7）大澤真幸(1994)「混沌と秩序」山之内 他編『社会システムと自己組織性』岩波書店　pp.289-346
8）大澤真幸(1994)「コミュニケーションと規則」大澤『意味と他者性』勁草書房 pp.3-97
9）ルーマン 土方 訳(1984)『社会システムのメタ理論』新泉社 p.188

実践的「場」の身体資本と欲望の呪縛

黄　順姫（筑波大学）

最近ある日本の雑誌で「ヘルシーは金で買える」という記事をよんだことがある。アメリカにおいてウェイトロス（減量）産業の年間の売上げが300億ドルにのぼっていて、ヘルシーやナチュラルが単なるファッションのレベルを越えているとのべてあった。人々は多少お金をかけてもダイエットを行い、エクササイズに夢中になっている。自らの身体の減量に対する配慮が「国民的行事になりつつある」とのことである。実際、ニューヨークの警官は犯罪が発生したとき身体の機敏さに欠けないよう体重の管理を義務づけられているとのことである。

このような状況のなかニューヨークでは新しいスポーツジムがつぎつぎに開店していく。しかも興味深いのはスポーツジムでの身体を鍛えるスタイルである。スポーツジムは建物の前面を全部ガラス張りにし、マシンを使って運動する人が道を通る人々からみえるようにしているのである。これはジムでエクササイズを行っている人に単に自らの身体を鍛えさせるだけでなく、外の他人からみられながらエクササイズをする快感を楽しませることになる。すなわち、ジムでエクササイズをする人はヘルシーでスリムな身体を作るためにエクササイズに精をだしている、という規範化された

文化にフィットする「自分」を確認し、その存在の証明を楽しむのである。また、外からジムのなかでエクササイズをしている鍛えられた身体をみる通行人は自分も身体を鍛えなければという脅迫観念におそわれるかもしれない。それだけでなく、ヘルシーでスリムな身体へ向けての自己管理をおこなうという規範からはずれて、自分自身は遅れをとっていると焦るかもしれない。このような焦りはヘルシーでスリムな身体への欲望をかきたてるに違いない。スポーツジムはこの「みる・みられる身体へのまなざし」を新たな顧客の確保の戦略として用いているのである。

日本においても、最近テレビの番組で身体を鍛えることに関するものが増えているように思われる。ある番組では腕立て、とび箱をとぶことの競技をおこない実況中継の形式でプログラムを進行させている。腕立ての場合をみてみると、一般の参加者に加えてテニスや柔道など有名スポーツ選手も参加させている。この腕立て競争の「場」では異常なほどの緊張感が漂う。腕立ては元来専門家のスポーツ競技種目ではなく、むしろ身体を鍛える一つの手段である。そのため、平素腕立てができることは特別に身体資本をより多く有していることとみなされないのである。しかしながら、競争の一つとして腕立ての実践的「場」をもうけると、はじめて、多くの回数の腕立てができる人は自らの身体に資本を蓄積していることになる。そこにそれぞれ違う種目の専門家のスポーツ選手と一般の人とをともに戦わせる妙味がある。

特定の種目のスポーツの実践的「場」において、そのスポーツの選手は身体資本を多く有するので優位を占めている。しかし、彼等は身体をめぐる転換された新たな「場」において、身体資本が増幅され、新たな象徴的価値を生み出すこともある。

たとえば、プロサッカー選手の三浦知良はサッカーを巡る「場」において自らの身体資本によって鍛えられた「優秀な」「有能な」選手として優位性をしめている。しかしながら、彼の鍛えた身体は女性雑誌のかかげる「男性ヌード・身体」の「場」においては、鍛え磨かれた「セクシー」な身体という象徴的地位をしめることになる。また、プロサッカーのラモス・ルイは39才の現役最年長の選手として実践の「第一線を維持」している。そして、彼の身体はスポーツ愛好者向けの雑誌のかかげる「年齢・身体強化」の「場」では身体を鍛え直し若さを維持する「全身強化」の新たなシンボルとして提示される。

このようにして、スポーツ選手の身体、延いては「スポーツする身体」はスポーツの「場」における身体資本の所持者としての象徴的価値をこえている。その身体は「ヘルシーでスリムな身体への自己管理」の言説のなか、「セクシー」「身体強化」「若さ」などのシンボルとして転換・解釈されながら、われわれに身体への新たな欲望をかきたてる。

ネットワークしましょ

スポーツ社会学会をEメールでネットワーク化しましょう

渡辺　潤（追手門学院大学）

1．僕がEメールをはじめたわけ

昨年４月よりスポーツ社会学会の編集委員を仰せつかっています。編集長は法政大学の平野さん。編集委員会は昨年の９月と10月に開かれましたが、その事前の打合せなどで平野さんから手紙や電話を何度もいただきました。電話はいつでも深夜に近い時間でした。「ご苦労さまです」と申し上げると、平野さんは「そうなんだよ、あんたのとこ京都だからさ、研究室の電話使えねぇんだよ。だから共同資料室に来て、かけてんだけどさー」。で「大学から?大変ですね」と言うと、「だからさー、Eメールはじめてくれない？」という注文。「パソコン通信にはあまり関心ないし、他にEメール使うような相手もいませんからねー」「そんなこと言うなよ。あんたはマック使ってPost Scriptなんかやってんだから、簡単なんだよ。モデム買って電話回線につなげるだけなんだから。頼むよ。大変なんだよ。俺！」「大変なことはわかりますけど、でも電話とマックを置いてある場所が離れてるんですよ……」「電気屋行けば延長コード売ってるから、それ買ってきてつないだら簡単だよ。頼むよ。大学でもマック使ってんだろ。そっちでもいいからさ」「僕の大学の電話は交換通しますから、つなげないんですよ。」「学内LANはできてないの」「あるみたいですけど、僕の部屋には回線は来ていません。」「誰か詳しい人に聞いて、引いてもらってよ」「来年の４月から全学規模で工事するみたいですから、その時になったら始めますよ。」「それじゃ遅いんだよ。編集委員への連絡のためにさ、今、必要なんだよ。頼むよ。」こんなやりとりが電話で数回。僕は平野さんの「頼むよ」に根負けして、パソコン通信をはじめる約束をしてしまいました。去年の夏休みのことです。

2．僕がEメールを勧めるわけ

で、他の委員にもほぼ徹底させて、委員会の連絡は基本的にEメールでという平野さんの願いは実現できることになりました。しかし、です。スポーツ社会学会は現在、編集委員会が東京で開かれ、事務局は九大、前と現の会長が京都にお住まいという状況にある。というわけで、全体の連絡網は、時に電話、時に手紙、あるいはファックス、そしてEメールと煩雑なことこのうえない。論文の投稿や原稿の依頼とその受け取り方法も、人それぞれで、編集委員会や事務局を任された人は、相手に応じたメディアの使い分けに翻弄されるという状態に陥ってしまっている。平野さんのぶつぶつはいっこうに収まる気配がないというわけです。「学会にさぁ、Eメールを普及させようと思うんだけど、学会の会報に書いてくれないかな。あんたが適任だと九大の山本さんに推薦したから、細かな話は山本さんとメール交換でやってよ」「僕はニフティのことしか知りませんよ。インターネットは端から眺めたことしかないし。」「メールが普及したらさぁ、会報を印刷せずにメールで送り届けることもできるわけよ。インターネットのWWWにスポーツ社会学会のホームページ作れば、会員一人一人に出す必要もなくなるだろ！何カ月か毎に内容更新していけば、後は会員が必要なときにアクセスして、情報を勝手に引き出せばいいわけだし、論文の投稿だってメールに一本化できるぞ。そうしようよ！」「そうしようよって言ったって、将来的な話としては魅力があると思うけど……」「そんな先の話じゃないよ、今の流れ見てたら。文章書いてよ、頼むよ！」僕は平野さんの「頼むよ！」には弱いんです。やれやれ。

3．Eメールのはじめ方

Eメールを利用する方法は、主に４つ。それを簡単に紹介しますが、いずれにしてもパソコンかワープロ（要通信機能）、それに多くの場合モデムが必要です。パソコンは最近の安売り競争で、基本ソフトの入ったものがワープロ並みの価格で買えるようです。モデムの値段はインターネットにも使える高速な機種で２万円台。通信ソフトはモデムに付属していますが、多機能で扱いやすさを強調した市販のソフトも売られています。で、パソコンとモデムをつなぎ、モデムを電話回線に接続させます。その際電話やファックスとパソコンを別々に電話回線に接続させる部品を買っておいたほうがいいでしょう。

(1) 商用ネット……モデムには、Nifty、PC-VAN、ASCIIネット等への入会案内書やアクセスガイドが付属しています。そこに書いてある手順に従っていずれかのネットへの入会手続きをします（これがパソコンからのはじめての通信になる）。登録を済ませIDとパスワード(共に最初は仮のもの）を受け取れば、すぐにEメールが使えるようになります。料金はニフティで1分10円（４月より改訂）、これに電話料金が加わります。料金はクレジットカードから自動で引き落としです。

(2) インターネット・プロバイダー……この場合にも専用のソフトとプロバイダーとの契約が必要です。プロバイダーには、民間（新聞・出版社他）と公営(自治体など）の２種類があり、使える機能や料金なども様々です。いずれにしても電話代が加算されるわけですから、アクセスポイントの近いところがいいでしょう。文字情報だけに限定されたネットワークと違ってインターネットは画像や音声を扱えるのが売りですが、十分に使うためには、NTTに申し込んでISDN回線にかえる工事をした方がいいでしょう。

(3) 学内LAN……これができている大学であれば、そこに手持ちのパソコンを接続すれば、インターネットにアクセスできます。必要なものはパソコンに組み込むEthernetボードと接続ケーブル、それにソフト。最近売られている機種ならば、全てがあらかじめ備わっているものが多いようです。大学ならパソコンに詳しい人も見つけやすいですから、これが一番簡単な方法だと言えるでしょう。使用料もかからないはずです。

(4) 学術情報センター……Eメールを使うためにはもう一つ、文部省の学術情報センターに利用申請をする方法があります。これは、学術論文データベースや図書の総合目録情報の検索などに使うもので、利用には時間や件数に応じた費用がかかります。しかし、国内のEメールは　現在のところ無料ですし、24時間サービスで、大学はもちろん自宅からもアクセスできます。パソコン(ワープロ）を使ったEメールの利用には、上記のような方法がありますから、それぞれ自分の興味関心や制約条件、あるいは可能性を考慮して選択すればいいわけです。たとえば、商用ネットは様々な情報や、フォーラムの場を提供していますし、インターネットなら世界中の個々のネットや組織、あるいは個人が提供する情報に接することができます。どれを選択しても、Eメールの送受信に不都合はありません。それぞれのところで取得したIDが電話番号や住所と同じ役割をしてくれるからです。たとえば、大学ではインターネットや学術情報、自宅では商用ネットを使えば、メールの送受信がいつでも可能になって、便利さは飛躍的に増すはずです。平野さんが夢想するような、Eメールを基本にした連絡事項の伝達や情報の回覧、あるいはおしゃべりや井戸端会議、さらには論文の投稿などが、一朝一夕で可能になるとは思いません。けれども、そのための水路作りを始めるのは、けっして時期尚早ではないと思います。インターネットということばのあっという間の氾濫は驚きですが、パソコン通信を始めて半年余りの僕が、Eメールを勧める文章を書いているんですから、先のことはわからないものです。

「SoSNet」への参加の呼びかけ

平井　肇（滋賀大学）

スポーツの社会的問題に関心のある者が集まって、ディスカッション・グループを結成しました。Sociology of Sports Networkの頭文字をとって、「SoSNet」（エス・オー・エス・ネット）と呼んでいます。

グループの目的は、スポーツの社会的な問題についていろいろと議論したり、情報の交換をすることですが、メンバー同士で関心のあるものなら（パソコンやインターネット等諸々のトピック）、何でもありのネットワークです。

主旨に賛同して、積極的に参加してくださる方であれば、資格はいっさい問いません。社会学の分野以外の方も歓迎しますし、大学の研究者以外の方も歓迎します。nifty-serveやpc-van等のパソコン通信にアドレスを持っておられる方も、参加できます。

以下にグループの約束事（マナー）を記しておきますので、ご参照ください。

【マナー】

1 「グループの性格から逸脱しないものなら、どんな話題でも歓迎です。」
2 「個人攻撃、誹謗・中傷するような内容は慎み、匿名は避けましょう。」
3 「ディスカッションは全員に送るのが原則です。」
4 「～先生、～君ではなく、～さんと呼びましょう。」
5 「できるだけ、リアクションを取りましょう。」
6 「ネットワークの輪を広げましょう」

※参加申し込みや質問などがありましたら、SoSNet-adm@sue.shiga-u.ac.jpまでe-mailでお願いします。

海外学会通信

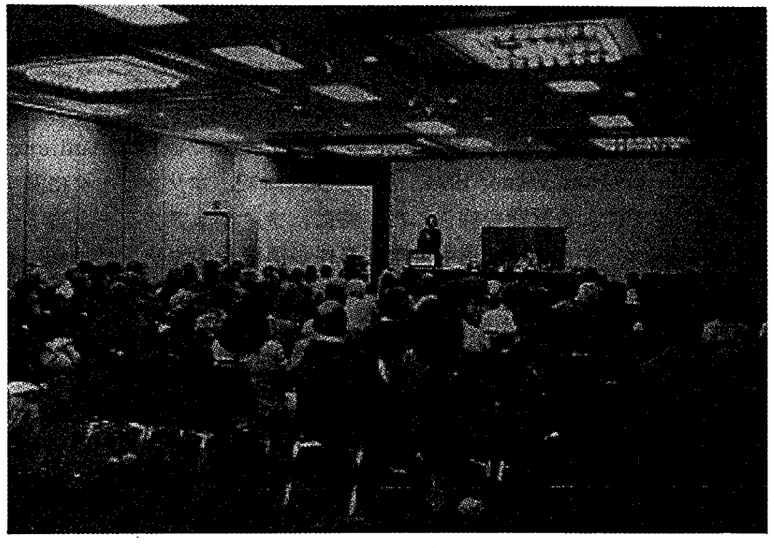
第16回北米スポーツ社会学会参加報告

北村尚浩・川西正志・野川春夫（鹿屋体育大学）

1995年11月１日から４日間の日程で、カリフォルニア州の州都サクラメント市において、北米スポーツ社会学会第16回大会が開催された。サクラメントはサンフランシスコから自家用車で約２時間のところに位置し、NBAチーム、サクラメント・キングスのホームタウンである。サクラメント河畔に広がるOld　Sacramentoの街並みには古き良きアメリカの佇まいを残しながら、ハイウエイを隔てたダウンタウンは州都らしい近代的な建物も並んでいた。第16回大会はそのOld　Sacramentoとダウンタウンのちょうど境にあるHoliday Inn Capital Plazaを会場とし、アメリカ合衆国、カナダをはじめとする各国から約170名の研究者が参加した。日本からの参加者は、野川春夫、川西正志（鹿屋体育大学）や杉本厚夫（京都教育大学）、山口泰雄（神戸大学）、平井　肇（滋賀大学）など９名であった。

今年は“Cultural diversity and the sport experience”をメインテーマに据え、3つの基調講演と44のセッションで発表が行われた。５～６セッションがそれぞれの会場に分かれて同時進行で進められたため、本報告では各セッションの細部にまで及ぶことができず全体的な概要報告であることをお断りしておく。

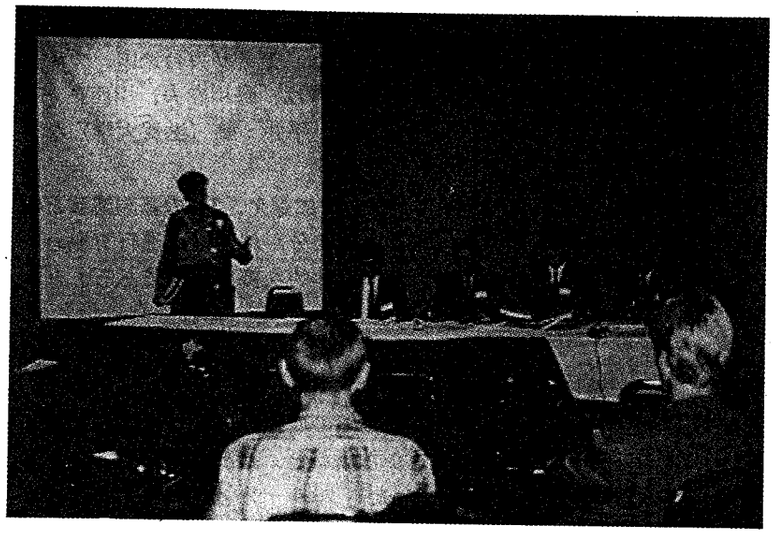
３回の基調講演の演者はすべて女性で、いずれも女性問題やジェンダーを取り上げたものであり、北米におけるこの種の問題の広がりを感じさせられた。まさに“Cultural Diversity”である。日本においても近年クローズアップされつつある問題であり、我が国の研究者にとっても新たな知見を得ることができるだろう。しかし、メインテーマとの関連からみると、基調講演のすべてがこの種の内容であったことは、日本から参加した我々を落担させた。スポーツを取り巻く諸問題も、Cultural diversityによって異なるのであろうが、もっと広範な問題を取り上げる工夫があっても良さそうなものである。また基調講演以外のセッションは、昨年同様６セッションが同時進行されたため各フロアでの参加者の数にばらつきがみられた。演題数が多いためある程度は仕方ないが、興味のある２つの演題が同時進行するケースもいくつか見られ、この点についてはぜひ改善してもらいたいものである。



基調講演の様子

メインテーマ“Cultural diversity and the sport experience”に関するセッションとしては、ヨーロッパ、アジア、アフリカン・アメリカン、フレンチ・カナディアンのそれぞれに関するセッションが設けられていた。

アジアのセッションでは、野川をオーガナイザーとして、川西が“New Japanese Sporting Lifestyle as Means of Social Adjustment toward Future Society”、山口が“Cultural Diversity and Sports Experiences:A Cross-Cultural Perspective between Japan and North America”、そして韓国から釜山大学の季が“A Study of Dual Roles of the Past Elite Athlete Wives and the Non-Elite Athlete Wives in Korea”というテーマで日本と韓国におけるスポーツ参加の現状をそれぞれ報告した。このセッションには日本でもよく知られているスポーツ社会学者ジョン・ホーン、ジョージ・セイジ、NASSS会長のティム・カリーらも参加し、活発な議論がなされた。



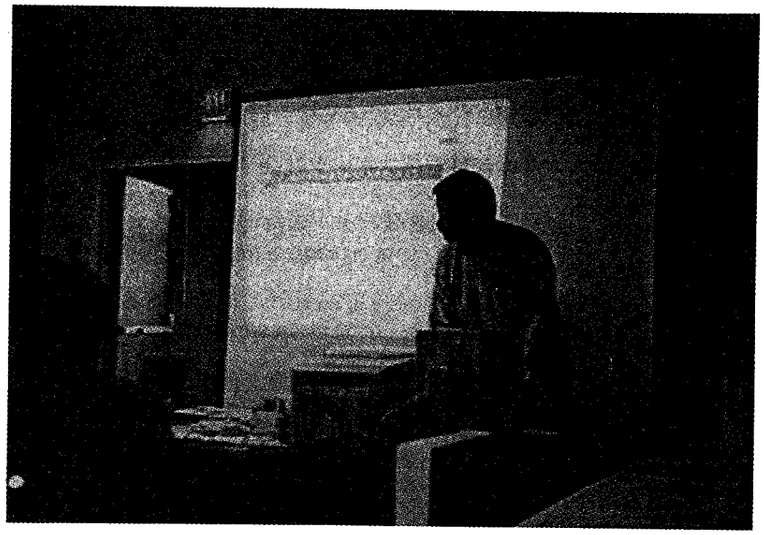
Thematic Discussion: Asian Spot Experiences

このセッションの発表に限らず、滋賀大学の平井がドジャースの野茂投手をトピックにした“Can Nomo Change Yakyu to Baseball? : Impact of Major League Baseball to Japanese Baseball Fans”というテーマで発表したほかＪリーグをテーマにした発表もみられ、日本をはじめとするアジア諸国における最近のスポーツの社会現象に対する北米の研究者たちの関心の高さが窺えた。次回の大会でもアジアに関するセッションが設けられることになっている。一般セッションの一つ「オリンピック・スポーツ（Olympic Sports）」のセッションでは、NASSS News letterでおなじみのNASSS事務局長であるリー・ヴェルデンがオーガナイザー兼座長を務めた。さらにそのセッションで彼は“Audience Reaction to the Olympic Games:Winter 1992 and Winter 1994”というテーマで、オリンピックに関する消費者行動といった視点からメディアによる影響を報告した。特に、フィギュアスケートのトーニヤ・ハーディング選手によるナンシー・ケーリガン選手の殴打事件が消費者のオリンピックに対するイメージに与えた影響についての報告は、興味深いものであった。また彼は、日本からの我々の参加を歓迎してくれ、日米比較研究に対する意欲を示していた。

今大会のプログラム委員でもある野川は、「エコノミクスとスポーツ（Economics and Sports）」のセッションで、1994年のワールドカップ・サッカーの日本人ツーリストを事例とした経済波及効果について報告した。

ところで、アメリカを発祥としたインターネットが、わが国のみならず世界的にも浸透しつつある。このような時代の流れを受けて、この大会でもインターネットにおけるコンピュータ・ワークショップが一つのセッションとして設けられた。このワークショップではNASSSのホームページが試作されており、会場にセットされたコンピュータから公衆回線を使ったPPP接続によってホストに

接続し、ニューズレター、ジャーナル及び文献検索などの機能が紹介された。このホームページが本稼働すれば、日本からもオンラインでSociology of Sport Journalを閲覧できるだけではなく、キーワードを使った文献検索も可能となる。わが国の体育・スポーツ研究者の間でも、徐々にインターネットの利用が一般的になりつつある。このようなホームページの整備が進むことで情報の収集や交換がよりスムーズになり、我々の研究視野がより拡がることが期待される。



Professional Development Practicum: Computer Workshop on the Internet

この第16回大会はカリフォルニア州での開催ということでアクセスが容易であったこともあり、筆者のほか、山口女子大学の松本耕二、東京YMCAの工藤康宏、中京大学大学院の久保和之らの若手も参加することができた。若手にとっては、海外の学会を目の当たりにし、多くの研究者と話をする機会がもてたことは大変有意義なものであった。第17回大会は、南部のアラバマ州バーミンガムで開催される。オリンピックが開催されるアトランタを州都とするジョージア州のお隣である。カリフォルニア州で開催された今大会に比べると、アクセス面でずいぶん不便ではあるが日本からも多くの参加者が期待されている。詳細についてはアラバマ大学のDr. Christopher J. Hallinan（E-mail: challina@bamaed.ua. edu）へ。

会員の動静

(1996年２月現在)

〈新入会員〉

上羅　廣（上野学園大学）

浅川重俊（筑波大学大学院）

〈住所等変更〉

編集後記

年度末を迎え、会員の皆様方におかれましては何かとお忙しくお過ごしのことと拝察いたします。日本スポーツ社会学会会報の第13号をお届けいたします。編集作業も３回目となると少しは要領がつかめ、前２号よりは手際よく編集を終えることができました。ご多忙中原稿をお寄せいただいた会員の皆様にお礼を申し上げます。

さて、インターネットが世間を席巻しておりますが、会報編集の方法も、日本体育学会体育社会学専門分科会事務局をお引き受けしていた頃とはすっかり変わりました。原稿は、多くが電子メールでの入稿となりましたし、写真や図表、ファックスによる原稿はスキャナで処理します。文書は大容量のMOに記憶させ、最終的には高品位のレーザープリンタでアウトプットします。印刷屋さんには、必要量のコピーと綴じ込みをお願いするだけです。

ところで、山崎正和氏はある著書において、現代を素人の時代として特徴づけ、その功罪を論じています。カラオケブームを例に引くまでもなく、素人が玄人のまねをすることは文化の大衆化ということでは意味のあることだが、本物の芸術は育たないというわけです。大変だ大変だとはいいながら、こうした作業に結構はまっている僕は、出版文化の大衆化に貢献できるでしょうか。

(Yamanori)

日本スポーツ社会学会会報　第13号

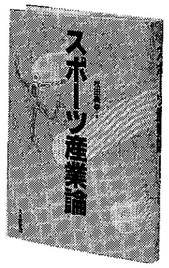
発行：日本スポーツ社会学会事務局

〒816　福岡県春日市春日公園６丁目１番地
九州大学健康科学センター内
Tel:092-573-9611(709：山本, 720：吉田)
Fax :092-592-2866
E-mail:yamamoto@ihs.kyushu-u.ac.jp
GHE00164@niftyserve.or.jp

郵便振替口座番号：00390-0-43962
加入者名：日本スポーツ社会学会事務局

スポーツ産業とは何かを体系的に明らかにする！

スポーツ産業論



●松田義幸 著

スポーツ産業はいかにあるべきか——この課題に対応する標準的なテキストとして最適の書。

[主要目次]第Ⅰ部—スポーツ産業の市場構造　第Ⅱ部—スポーツ産業の市場行動(1)　第Ⅲ部—スポーツ産業の市場行動(2)　第Ⅳ部—スポーツ産業の公共政策　第Ⅴ部—スポーツ産業の個別市場分析

●A5判・上製・280頁　定価2,369円

歴史の目で日本的スポーツの「いま」を問う！

日本的スポーツ環境批判

●中村敏雄 著

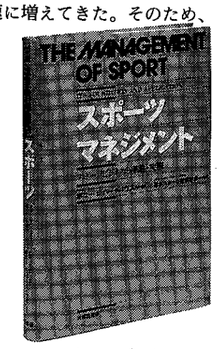
社会とともにスポーツもまた激しく変化・変貌する今日、〈スポーツ環境学〉の必要性を提唱しつつ、あるべき「部活」への構図をするどく描く。

●四六判・258頁　定価1,957円

スポーツ・マネジメント

●ボニー・パークハウス 編著
●日本スポーツ産業学会 監訳

社会の中でスポーツの役割や機能が増すにつれ、スポーツを商品とするビジネス的側面が急速に増えてきた。そのため、専門的なビジネス・マネジメントの手法をスポーツ領域でも確立する必要があり、スポーツ分野の会計と予算、経済学、法律、コミュニケーション、マーケティング、経営管理、倫理問題など、その研究と実践を集めて理論と応用の両面から記述した先駆的な書。



●B5判・上製・296頁　定価3,605円

〈スポーツ界の鬼才が放つ待望の書！〉

スポーツフィールドノート

●松浪健四郎 著

スポーツ界の鬼才が日本スポーツの深層に迫る。その筆法は鋭いがスポーツを愛する著者の真情が読むものの心を打つ。「体育科教育」連載中から１冊にまとめられることが待ち望まれていた快著。

【主要目次】
Ⅰ　"タレント教授"奮戦記
Ⅱ　格闘技通信
Ⅲ　スポーツ人類学への招待
Ⅳ　国際化時代のスポーツ文化
Ⅴ　現代スポーツの死角　ほか

●四六判・192頁　定価1,339円

企業・スポーツ・自然
—株式会社ニッポンのスポーツ

等々力賢治 著

スポーツが政治や企業に利用されていることを排し、人々の生活を豊かな文化として発展することを願う立場から日本スポーツの在り方を問い直す。

●四六判・274頁　定価2,060円

現代社会とスポーツ
Sport in Society

P.C.マッキントッシュ 著
寺島善一・岡尾恵市・森川貞夫 編訳

スポーツ発祥の地イギリスの土壌にたつ著者の広く深い洞察により、スポーツと政治、余暇、アマとプロ等の問題が鋭く抉られていく。

●A5判・240頁　定価1,800円

スペクテイタースポーツ
—20世紀アメリカスポーツの軌跡

ベンジャミン・レイダー 著
川口智久 監訳・平井 肇 訳

多くのスポーツヒーローを輩出させた1920年代から、スペクテイタースポーツ（見るスポーツ）主流の1980年代に至るアメリカスポーツの社会史。

●A5判・282頁　定価2,575円

大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 ［書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください］▶Tel.03-5999-5434 Fax.03-5999-5435

スポーツ・レジャー社会学　オールターナティヴの現在

デービッド・ジュリー／ジョン・ホーン
清野正義／山下高行／橋本純一　　編著／A 5 版334頁、定価2900円

――今日、私たちの生活のなかで、スポーツやレジャーの占める比重が圧倒的に高まってきている。生活世界におけるスポーツ・レジャーの位置や意味を多方面から分析し理論構築を図ることは、日本はもより、世界的にもみて社会学上の課題となっている。それは、多様な意味と重層的構造を持つに至っている現代社会におけるスポーツ・レジャーの分析のために、より一層深められた理論トゥールを持つ必要が生じてきているからに他ならない。
本著での私たちの試みもこのような流れのなかに位置している。イギリスの気鋭の社会学者、デービッド・ジェリー、ジョン・ホーン両教授を迎え、日英の研究者によるイギリス、フランスを中心としたヨーロッパの理論社会学の批判的検討という共同作業を通じて、スポーツ・レジャーに関する分析の深まりと理論構築の新たな展開をめざしたものである。

（「編者あとがき」より）

［主目次］

序章　イギリス・スポーツ・レジャー社会学と日本の研究／山下高行・清野正義
Ⅰ　ブリティッシュ・カルチュラル・スタディズとスポーツ・レジャー研究／ジョン・ホーン
Ⅱ　ヘゲモニー論とスポーツ社会学研究
　1　「スポーツとヘゲモニー」論の地平／橋本純一
　2　ポスト・フォーディズムのもとでのスポーツ・レジャー／山下高行
Ⅲ　ピエール・ブルデューとフランス・スポーツ社会学
　1　ブルデュー社会学とフランス・スポーツの研究／三浦弘次
　2　ブルデュー社会学とスポーツ研究の可能性／棚山　研
Ⅳ　スポーツとレジャー研究におけるフィギュアレーション社会学再論
／デービット・ジェリー＆ジョン・ホーン
Ⅴ　「企業社会」日本のレジャーとスポーツ／川口晋一
Ⅵ　労働時間、スポーツ、空間／清野正義
終章　スポーツ・レジャー社会学における理論および方法論の新たな方向性
／デービッド・ジェリー＆ジョン・ホーン

〒171　東京都豊島区高松 2-8-6　道和書院　TEL (03) 3955-5175　FAX (03) 3955-5102